人間科学研究　Vol. 18, Supplement (2005)

博士論文要旨

「災厄」の構図
－バリ島東部の黒呪術と祖霊祭祀の関係性をめぐる考察－
The Composition of a "Disaster": Observation on the Rerationship between Black Magic and Ancestor Worship in Eastern Bali

村田　敦郎（Murata, Atsuro）　　指導：蔵持　不三也教授

1．本稿の視座

本稿が取り扱う中心的テーマはインドネシア共和国バリ島東部の「黒呪術（ilmu hitam/pengiwa）」である。黒呪術は、文化人類学史上では妖術（witchcraft）と邪術（sorcery）研究の領野に含まれるが、本稿では、調査地域において頻繁に使用される「黒呪術」という用語を採用した。

理論的背景として、災厄の説明様式としての黒呪術という視座を取り入れている。しかし、ここで新たに問題として設定したいのは、その災厄が、黒呪術師と目される人間あるいは「被害者」やその周囲の人間のなかでどのように生成され、展開していくかというプロセスである。つまり、不幸や病など人々を脅かす妖術の負性がいかにして日常世界のなかであらわれるのかに注目し、妖術が解釈する枠組みあたえることによって、いかに人々が不幸の経験を組織化するかという視点で分析をすすめたい。というのは、人々は黒呪術の語りを起点として多様な社会的諸実践を展開し、黒呪術そのものを越えた社会的、道徳的、政治的意味を生み出すからである。

この問題点を念頭において本稿は、時系列的に個人・集団・社会のコンテクストを分析していく方法をとる。一連の出来事がどのような人間関係のマトリクスの中で生じ、出来事の経緯によってそれらの人間関係にどのような変化が生じたか、そして、それらの変化がどのような新たな物語を創り上げていっているかを詳細に追う。

これらの多岐にわたるコンテクストを読み解くために重要なキーコンセプトは家族である。具体的には、本稿の事例は、ある一族に起こった災厄を取り上げている。たしかに、サンプル数としては少ないかもしれない。しかし、調査対象となった人たちの多様な社会的実践や、人間関係の流動を時間的推移にそって詳細に描いた報告はあまりみられないように思う。そこで、人々の実践が相互にどのように関係しているのか。さらに災厄に対する説明と対処にみられる語りや知識が互いにどのように参照されているのか、どのような文化要素が災厄の特殊性を特徴づけてゆくのかを、詳細に検討できると考える。

バリ社会の人々が黒呪術に蓋然性を与え、また黒呪術が人々の行動に有効性を与えるコンテクストを問うことは、呪術研究にとっても重要な視角であろう。さらに、このような視座から、従来のバリ文化研究における黒呪術の位置づけを再考し、「黒呪術」をめぐる実践が、密接に絡み合いながら起動する複数の文化装置の中で展開する様態を明らかにすることを本稿の目的としたい。

2．調査の概要と事例の要約

調査対象地域は、インドネシア共和国バリ州カランガスム県（Karangasem）の南東部にあるX村である。この村はバリ・ヒンドゥーの総本山（pura Besakih）ブサキ寺院を麓に擁する霊峰アグン（Agung）や、スライヤ山（Seraya）から流れ出す河川が形成した扇状地を利用する農業を中心産業に据え、わずかだが漁労を営む住民もいる。バリ南部のバドゥン県（Badun）やタバナン県（Tabanan）に比べて観光化は進んではいないが、近年では、村内海岸部に外国人専用のコテージやレストランなどの観光施設も見られるようになっている。

調査対象とした家族は、長老のワヤン・クチョス（以下、人物名は全て仮名）を家長とする総勢48名（男18名、女30名）で構成されている（2002年４月現在）。クチョスは現在までに妻を８名娶り（死去・離婚４名）、家族は結婚した娘・孫娘の一部を除いて同村内に戸籍をおいている。長老クチョスは、付近はもとより州都デンパサール（Denpasar）まで、その名が響いている高名な呪術医（balian）である。老齢ながら現役であり、同家族内における経済力も高く、多くの子供や孫が彼に借金をしている。また、他村で自身の親戚の家で暮らしている第５夫人を別にして、他の妻たちはあらゆる面で平等に扱っているという。

この家族の家長の跡継ぎは、第１夫人次男のサルである。彼は小学校教師を勤めるかたわら、呪術医を兼業している。家族の成員は、体調を崩したとき、あるいは経済問題などに関してクチョスやサルに助言を求めることが少なくない。2001年５月から2002年３月にかけて、この家族にさまざまな災厄が降りかかる。「被害者」は８名（男５名、女３名）とされ、その内訳は病・けが・事故・人間関係の不和・経済問題、さらに憑依現象など多岐にわたった。これらの災厄の原因は「黒呪術師」とされる第８夫人ニラの黒呪術に帰せられるのだが、その発端は第７夫人ルミの次女ワティが悪霊に憑依されたことによる。その後、ルミはその原因

を確かめるべく、隣村Pに住む女性占い師トゥカン・トゥヌン（tukang tenung: 以下トゥヌンと略す）のもとに赴いた。トゥヌンはいわゆる巫師で、依頼者の祖霊を自らの身体に憑依させて、依頼者の抱える問題について助言を与える。ルミはこの占い師のもとにワティの錯乱後すぐの時期、4月15日、さらに5月29日の計3度訪れた。占いによって、知った新たな事実は、根本的な災因が「黒呪術」ではなく、「祖霊祭祀の未遂行」であった。そのため家族は、莫大な費用がかかる祖霊祭祀に動き出すようになる。この一連の事例において、権勢を振るったとされるニラと彼女を擁護した長老クチョスの地位は下降し、かわってサルと第7夫人ルミが集団内のリーダーシップを握るようになったのである。

本稿では、この家族にふりかかった「災厄」への認識と対処、そして人間関係のマトリクスがいかに変容するのかを分析している。

3．考察

本稿では、「黒呪術に起因する災厄」の経験がいかに人々の日常の中で展開していくかに着目し、多様なコンテクストから考察を試みた。人々の災厄に対する対処法やどのようなコミュニケーション・ルートを使用して災厄を生成し、それを変容させていくかが提示できた。そこには、災厄という緊張状態への処理において、黒呪術に限られないさまざまな文化資源が動員し、最終的に本来なら黒呪術と異なるコンテクストに位置する「祖霊祭祀」に接続し事態を収束する様態がみてとれたのである。その時々の問題を、人々は呪術医や占い師指示をうまく用いてクリアしていった。そんな彼らにとって、正しい行動は正しい結果をもたらす、という信念から導かれる遂行効果というべきものが存在したのではないだろうか。

また、コミュニケーション・プロセスの分析から、黒呪術事件が発生する要因が、たまたま重なったに過ぎない複数の病や事故、そして占い師や呪術医などの専門家の助言、黒呪術という文化要素をのぞいた個別の人間関係が強く影響していることが明らかになった。

そこには、災厄という緊張状態への処理において、黒呪術に限られないさまざまな文化資源が動員される様態がみてとれたのである。その時々の問題を、人々は呪術医やトゥヌンの指示をうまく用いてクリアしていった。そんな彼らにとって、正しい行動は正しい結果をもたらす、という信念から導かれる遂行効果というべきものが存在したのではないだろうか。

また、本事例の中で特筆すべきは、黒呪術師への裁きというクライマックスがないまま、事件が終息した点だろう。黒呪術師は、多数の声、多様な感情、多数の主体によって日常に現れた異質なものとして構成され、排除されようとしていた。だが、神上がり儀礼の遂行によって、異質なものとの調和と不調和を含み込む総和が創り出されたのである。バリにおいて集団が恒常性を維持しようとするこのような傾向は、ベイトソンの提唱する「定常型社会」や、ギアツがバリ人の社会的行動の特性として述べた「クライマックスの欠如」を想起させる。彼らは、バリにおける社会関係において、喧嘩や争いはほとんど回避され、加熱した相互行為はみられず、身体動作や経済的側面においてもある種の倹約性、無駄な蕩尽の回避がみられることを指摘した。

本稿における分析と考察で確認された問題の移行を促すコンテクストとプロセスも、この指摘の範疇に符合するのではないだろうか。その意味で、本稿は定常型社会の理論に対して、災厄時におけるバリ人の包括的な文化パターンを具体的に示せたのではないかと考える。しかし、このような定常型社会理論が、絶対的なバリの文化パターンだと断言するつもりは毛頭ない。というのは、「定常型」という概念はイアトムル型社会との対比という文脈の中で語られたものであるし、バリには植民地時代にオランダ軍に対して行った王族の死の行進、王妃の殉死儀礼、また舞踊や演劇時におけるトランスによる自己への攻撃などの例外が、多く存在するからである。したがって、本稿で示した文化パターンとは、あくまでも限定された状況におけるものであることを明言しておかなければならないだろう。